

## 第5回・風景デザインワークショップ／2010年6月11日

### 《座談会》

第5回・風景デザインワークショップ初日のシンポジウムでは、景観デザインのパイオニア的存在である篠原修氏〔政策研究大学院大学教授／東京大学名誉教授〕を東京からお招きし、司会の星野裕司氏〔熊本大学准教授〕の進行のもとに「九州におけるこれからの景観デザインを考える」と題したテーマで座談会が行われました。円形のホールである会場で、篠原先生を聴講者が囲み、聴講者の質問に対して篠原先生が返答をするといった形式で進められました。

今回の風研デザインワークショップは5周年ということもあり、一つの節目の年となることから、次のステップにどう進めば良いのか、また、今ある課題に対して今後どう取り組めば良いのか、という導入で議論が始まりました。



大きな議論の流れとして、「連句方式」というキーワードが挙がりました。篠原先生の説明では、連句とは五七五の長句に七七の短句を、違う人が付け足して一つの作品にするものであり、一つの句にそれぞれルールがある。一つの良い句に対して、次の人がその意図を汲み取ったうえで良い句を付け足す。その積み重ねでよりよい作品ができていく。このような流れはまちづくりや景観デザインの進め方のあるべき姿である、ということでした。

次に、「九州」という場所の特異性や価値観についての議論になりました。会場からは、小林一郎氏〔熊本大学教授/本会会長〕による「当事者市民が出てくる可能性が最も高いのは九州」という意見や、島谷幸宏氏〔九州大学教授〕による「九州は海を境界と考えていないことや、文字になる前からの歴史が長くある」という意見など、九州の独自性や可能性についての意見が出ました。篠原先生からは、九州ばかり見て議論するのではなく、日本や世界を普遍的に覆っている価値観を知り、その上で九州における独立した景観の価値感を提示することの重要性について、ご提言いただきました。

## 第5回・風景デザインワークショップ／2010年6月12日

### 《事例発表会①小戸之橋 市民と創る歩いて楽しい橋づくり》

松葉勲氏〔宮崎市市街地整備課〕、出口近士氏〔宮崎大学准教授〕、吉武哲信氏〔宮崎大学准教授〕、増山晃太氏〔熊本大学学術研究員〕をパネラーに迎え、小林一郎氏〔熊本大学教授/本会会長〕のコーディネートにより、宮崎県宮崎市大淀川河口の小戸之橋の架け替えプロジェクトに関する報告が行われました。

初めに、本事業を理解するためのポイントとして、①Made in Kyushu であり、市発注の道路（橋梁）設計であること、②宮崎市・宮崎大学・熊本大学による新しい協働の可能性があり、③委員会（コンセプト）とワーキング（デザイン）の連動により、全体的にも部分的にも市民の意見を反映させることが可能となったこと、の3点を小林一郎教授が話されました。



つづいて、松葉勲氏より小戸之橋の概要と設計の進め方、特に昭和通線（小戸之橋）技術・景観検討委員会の設置とその活動内容や役割について説明がなされました。施工開始が十数年後の予定であることから、計画の方向性をある程度維持できるようにガイドラインを策定し、また景観ワーキンググループ（宮崎市・宮崎大学・熊本大学）とワークショップ（地元住民や利用者）が詳細設計～施工（工事）～完成まで継続的に働き続ける体制を構築することの重要性について話されました。



さらに、吉武哲信准教授より、ガイドラインの目的・役割、ワーキンググループとワークショップについての詳細な説明とそれぞれの課題や進め方についての説明、出口近士准教授より、委員会設置の経緯と共に、小戸之橋の属する大淀川地区重要景観形成地区に関する説明がありました。最後に増山晃太氏より、具体的な小戸之橋のデザインについての模型を使った説明がなされました。

本セッションの事例は、市発注の事業の中で、委員会やワーキンググループ、ワークショップといった仕組みを取り入れ、コンセプトやデザインの一貫性を確保しながら、時代の流れの中で必要な変化に対応する仕組みづくりを行なった点が特徴的でした。

## 第5回・風景デザインワークショップ／2010年6月12日

### 《事例発表会②子守唄の里 五木の村づくり》

第2セッションのテーマは、土木学会デザイン賞優秀賞、日本造園学会賞（技術部門）を受賞した「子守唄の里 五木の村づくり」です。徳永哲氏〔株式会社エスティ環境設計研究所所長〕、星野裕司氏〔熊本大学准教授〕をパネラーに迎え、田中尚人氏〔熊本大学准教授〕のコーディネートにより進められました。

徳永哲氏は、川辺川ダム建設計画に伴う、村の移転先である頭地代替地の計画を行い、村づくりを進める際に現場で行った活動について主に発表されました。その中でも、宅地の高低差を利用し里道を提案する、擁壁の表面をリアルに再現する、村にあった木を新しい村に植えかえる、といった『景観メモリー』に重点を置いて報告されました。

活動では、実物大の模型による検討や、委員会とは別に中学生とのワークショップや地域住民と話し合いの場を設けたり、住宅デザイン相談会を開催したりといった、地域住民の理解を得るための取り組みも行ったとのことでした。

土木学会デザイン賞の幹事をされていた星野裕司准教授は事例について、「設計者の地域に対する一貫した“誠実さ”が、最後まで手を抜かないプロセスやデザインにあらわれており、その結果としての良い村づくりが賞に値した」と評価を述べました。

会場からは「表層だけ見て素晴らしいと思うことは大きな間違い。五木村の住民は以前住んでいた所から追い出されて今現在の村に住んでいる、住民の痛みというのを頭の片隅に置いておくことが必要である」という意見が出るなど、土木を勉強するにあたってダム問題と村づくりの話は切り離せない、本質の部分から目を離してはいけない、という結びが得られ、8月の風景デザインサロンに向けて、より理解を深めるための時間となりました。



## 第5回・風景デザインワークショップ／2010年6月12日

### 《事例発表会③柴北川プロジェクト 暮らしを守り風景を育てる》

渡邊雪法氏〔柴北川を愛する会〕、幸野敏治氏〔大野川流域ネットワーク〕、木寺佐和記氏〔共助研／西日本技術開発株式会社〕、波木健一氏〔共助研／株式会社福山コンサルタント〕、前田武氏〔共助研／ジェイアール九州コンサルタンツ株式会社〕をパネラーに迎え、高尾忠志氏〔九州大学特任教授〕のコーディネートにより、大分県豊後大野市犬飼町長谷地区の柴北川プロジェクトに関する議論が行われました。

はじめに波木健一氏が、共助研立ち上げの背景や、活動のテーマ、九州の中山間地域の現状について話されました。そして住民と行政、企業という主体の間に第3者組織として存在する共助研が、さまざまな不安を抱える中山間地域の人々をどのように支援していくのか、ということについて語られました。

つづいて渡邊雪法氏より、歴史や住民構成など、長谷地区についての説明がなされました。少子高齢化により昔からある田んぼや畑の風景が失われる危機感はあるが、中心となって動く人がいないということが「柴北川を愛する会」設立の要因となったこと、「柴北川を愛する会」では、地区内の清掃活動や道に彼岸花を植えることなどを主な活動内容として行っているとのことでした。

幸野敏治氏からは、「大野川流域ネットワーク」について話されました。幸野敏治氏の話では、大野川と他の川を比較し、大野川は源流の山を3つ持つこと、本流にまちを持たないことが特徴である、とのことでした。そして「大野川に感謝する事」という会則のもと、自然との共生、行政との共同、絆をテーマに川の中から地域へ目を向け、大野川流域をもっとよく知るために活動を行ってきた、とのことでした。

最後は、木寺佐和記氏が柴北川プロジェクトについて、山桜105本の調査や情報のデータベース化を行ったことなどを述べ、前田武氏が長谷地区で行ったワークショップの内容や、廃校となる小学校をこれからどう活用していくのか、ということをお話されました。そして、地元の人の声や建設コンサルタントの人々が感じたことなどをふまえ、この活動をどのように継続していくのか、という点が今後の課題として議論されました。

